

# 大学現場での日本人ボランティアによる効果的な日本語学習支援 —「社会型日本語教育」の一形態として—

Effective Japanese Language Instruction in the University Using Japanese Volunteers  
—One form of ‘shakaigata nihongo kyooiku’ in Japanese Language Education—

高橋志野・石橋容子・田中喜美代

TAKAHASHI Shino・ISHIBASHI Yoko・TANAKA Kimiyo

愛媛大学国際教育支援センター

Center for International Education, Ehime University

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

takahashi.shino.mm@ehime-u.ac.jp

Abstract: At Ehime University we are continuing to use Japanese language volunteers, ‘J-Supporter(s)’, in all classes focusing on oral skills. Participating international students are very pleased to have these volunteers in class, however, class preparation and in-class facilitation with the resulting mixture of student and community volunteers which changes each class time has been an ongoing trial and error process for the teacher in charge. This paper introduces how these classes have been effectively managed for the past 4 years highlighting similarities with Shinada, et al (2012) in ‘shakaigata nihongo kyooiku’.

キーワード：口頭表現授業、サポーター、「社会型日本語教育」、対話、参加者の変容

## 1. はじめに

愛媛大学では、口頭表現中心の授業全てで、日本語ボランティア J-support (以下サポータ) を活用しており、参加留学生から非常に高く評価されている。<sup>注1)</sup>しかし、社会人・学生が混在し毎回異なるサポータが参加する授業を、齟齬なく運営する授業担当教員の負荷は、教員単独で行う授業とは比べものにならないほど大きい。本発表では、平成 21 年度より 4 年間、口頭表現授業担当教員の一人が行ってきた、サポータの授業参加を最大限活かシデメリットを軽減する試みを紹介すると同時に、品田等(2012)の「社会型日本語教育」との共通点を報告し、大学という学びの場における「社会型日本語教育」の可能性を考察する。

## 2. 口頭表現クラスの概要

愛媛大学では、口頭表現クラスの担当者に対して、サポータをできるだけ多く活用するよう依頼している。そのため、今回考察するクラスは、現在各学期 15 回の授業のうち、ガイダンスと最終試験を除く 13 回全てにサポータも参加し、以下のような流れで 90 分の授業を実施している。

表-1 授業前の流れ

分	内 容
	当日の発表者が「難しい表現」を板書
	学習者・サポータは事前に並べた返却宿題・ネームテント・配布プリントをとって着席

表-2 授業中の流れとおよその時間

13	授業参加者の出席確認と一言コメント
4	前回のスピーチ中の「サポータが感心した表現」をサポータの 1 名が発表

4	スピーチ発表 (1 回目)
5	スピーチ内容確認 (発表者以外の学習者がスピーチで聞いたことを発表)
2	学習者とサポータがそれぞれスピーチ原稿・コメント票を配布
4	スピーチ発表 2 回目 (他の学習者・サポータは原稿を見ながら文字で内容確認)
4	(あれば) スピーチの表現について質疑応答
2	話し合いのテーマを 3 つ提示
5	学習者とサポータの組み合わせの発表と移動
15	テーマについての話し合い (7 分)
×	話し合いの内容の発表へのまとめ (3 分)
3	クラス全体へ話し合い結果を発表 (5 分)
3	上記手順を 3 回実施
2	今週の宿題の提示

表-3 授業後の流れ

	全員がその日のスピーチに対するコメント票を提出し、ネームテントを返却。学習者は前回の宿題、サポータは記録簿も提出。
--	---

## 3. 「社会型日本語教育」とは

社会型日本語教育という用語は、地域日本語教育の重要性を指摘する石井(1997)で初出されたためか「生活者としての外国人のための」日本語教育の文脈で言及されることが多い。そのため、品田等(2012)が指摘するように「学校型日本語教育」vs「社会型日本語教育」と「二項対立的見方」で判断され、学校という枠組みでは運用が難しいと思われがちである。しかしながら、中河(2011)の「日本人と外国人双方が関わる共有問題として学習し、そのプロセスで双方がそのための日本語

力（コミュニケーション力）をつけてゆく」ことは、大学教育現場にも必要かつ有用な学び合いである。実際、品田等(2012)が「社会型日本語教育」実践に重要であると考える3つの概念①リアリティ②対話③参加者の変容は、愛媛大学の口頭表現の授業担当者がサポータ活用を考えていく過程で生じた変化・目指したものに一致している。

#### 4. 「社会型日本語教育」の3つの概念との共通点

##### ① リアリティ

サポータ活用開始時は市販教材をもとにクラスでの話し合いのテーマを決めていた。しかし、話し合いが予想ほど盛り上がらなかったため、現在は学習者がA4・1枚程度のスピーチを発表し、それについて全員が小グループに分かれて話し合う形式をとっている。「日本で困っていること」という大きなテーマから、「学習者自身が困っていること」について問題提起のスピーチをし、その後、それに関連した「話し合いのテーマ」を3つ提示するという形にしているが、これは学習者・サポータ双方から非常に好評である。実際、各学期の「日本で困っていること」のスピーチを集めると、留学生が愛媛で生活する中での共通した問題点（敬語、聞き取り、交通マナー、行動様式の違い等）が浮かび上がってくる。

##### ② 対話

サポータ活用開始時は、学習者とサポータの人数比率や話し合いの手順も、その場の状況に任せることが多かった。その結果、サポータが一方向的に話して学習者が話す余地がない、サポータと学習者がうまく会話を進められない等の問題がでてきた。このような問題点を解決するために、現在はガイダンスの段階で、以下のグランドルールを学習者とサポータ双方に提示している。<sup>注2)</sup>

##### 【話し合いのグランドルール】

- 1) 積極的に話したか
- 2) 他のメンバーの話をよく聞いたか（あいづちも含む）
- 3) 他のメンバーの話にコメントを返したか
- 4) あまり発言していない人に意見を聞いたか

このようなグランドルールを徹底することと、話し合った内容をクラス全体に発表することで、ある程度「きちんとした話し合い」が可能となった。また、スピーチ発表者が現実に困っていることを「話し合いのテーマ」としているため、学習者もサポータも非常に真剣に話し合いを行っている。

ただ、録音したデータから発話内容を確認した

ところ、話し合い自体は非常に盛り上がっているものの「対話」レベルではなく「おしゃべり」にとどまっている事例も多く、この点については今後検討する必要があることが明らかとなった。

##### ③ 参加者の変容

リアリティと対話を重視した授業を行ったことで、学習者・サポータ双方が、気づきと学びの機会を得たと述べている。授業終了後に実施したアンケート（学習者）と有志に対する個別インタビュー（サポータ）によると、学習者はこの授業を「たくさん日本人と話せた」「日本語の言葉遣いを直してもらえる」ことで日本語が上達したと感している。また、「日本人は何故こう行動するのか不思議だったところがすっきりし」、「だんだん日本人の考え方がわかるようになった」だけでなく、「相手の立場から考えるようになった」と振り返っている。一方、サポータも留学生の現実の問題を知ることで「日本人として考えさせられることがたくさんあり」、「それぞれの国の話や様々な考え・意見を交換できた」おかげで「自身の価値観・考え方が格段に広げられ」「自分が大きく成長できる貴重な機会であった」と捉えている。また、サポート経験を重ねることにより「外国人への話し方の配慮を学べた」としている。

#### 5. まとめと今後の課題

大学という学校現場でもサポータ活用を効果的に行おうとすると、それは「社会型日本語教育」の目指すところに近づくことが明らかになった。ただ、サポータとの学び合いを一層価値のあるものにするためには、「対話を可能にする日本語の表現」についてガイダンス等で提示するべきであろう。また、参加者の変容については、今後より詳細な分析を行う必要があると思われる。

注

- 1) サポータは、愛媛大学各学部の学部生・院生だけでなく、他大学の学生、主婦や定年退職者といった社会人でも構成されており、彼らの背景、参加理由、日本語教育に関する知識等は非常に多岐にわたっている。
- 2) このグランドルールの基本概念は、SPOD フォーラム2010で実施のプログラム「失敗しないグループワーク導入のためのチームビルディング」（立川明）による。

#### 参考文献

- 石井恵理子(1997)「国内の日本語教育の動向と今後の課題」『日本語教育』94号、日本語教育学会pp.2-12
- 品田潤子他(2012)『「社会型日本語教育」を担える人材とは—教師教育の視点から—』『2012年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.65-76
- 中河和子(2011)「第1章 問題の所在」『平成22年度文化庁委託調査研究 生活日本語力の指導能力の評価に関する調査研究』国際日本語普及協会 pp.3-7